

ぐわつくわうとひびける如き月夜なり

藤田湘子

表記の面白さに意表を突かれた句。たとえば漢字で「月光」と書けば、見慣れた澄んだ月夜をすんなり享受できる。ところが、ひらがなでしかも旧かなで書かれると、一音一音分解して発音するような、喉もとに何か引っかかりながら吐き捨てるような、一筋縄ではいかないものを感じる。

平成十六年作。『てんてん』所収。湘子が、死の前年に見たこの世で最期の秋の、月夜である。研ぎ澄まされていながらもどこか達観したような、諦観からくる鈍い明るさのようなものも感じる。『てんてん』には好きな句がたくさんある。湘子最晩年の孤独な呟きが聞こえるようで切ないが、その分しみじみと心に沁みる。

2004年 (H16作) 第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京